

1. 機能言語学の系譜

意味はいかにして創出され、理解されるか。その「意味」の本質的な姿を捉えるにはどうすればよいか。これは諸科学にまたがる基本問題であるが、とりわけ言語学では意味世界の内側から意味世界全体の眺望を記述しなければならないような難しさがある。もっとも、修辞法、比較文法、文献学などのように、年代や社会の層位といった観点に基づきテキストの実相を記述しようとする研究では、意味をひとまずは自明のものとして扱うことも伝統的に行われてきた。しかし、そうした言語現象を生じさせる一般原理に目を向けるならば、F.ソシュールにはじまる「記号体系」を言語研究の根幹にすることが決定的に重要となる。

機能主義に立脚する語彙文法は意味が形式に優先するようにモデル化されると見る向きもあるが、そうではない。テキストの機能的分析にもとづいて文法体系が記述されるとして、そこに提示される意味と形式は、コミュニケーションにおいて言語使用が合目的的に機能するべく、双方が互いに説明しあえる関係で結びつくものである。つまり、ひとつの意味成分とひとつの形式範疇が双方向的な対応関係をなす単純な「記号モデル」ではなく、両者が自然に結びつきうるポテンシャルとその具体化を包括するような「記号体系モデル」が必要なのである。M.A.K. ハリデーは、言語を意味活動の資源（ポテンシャル）と捉え、テキストは意味と形式が自然に結びついたものの具体表示（インスタンス）であるという。ハリデーにとって機能的な語彙文法とは、言語的資源と具体表示との自然な結びつきを可能にする組織層のことである。この意味で、機能主義とは社会的意味形成が可能になるように、意味・語彙文法・テキスト・文脈の関係を、相互実現の体系として記述しようとする理念である。

ソシュールを源流としながら、ハリデーが SFL の基盤となる体系—構造理論を発展させるうえで直接的な影響を受けたのは J.R.ファースである (Butt 2019)。ファースは言語が本質的に社会的な現象であると見なし、具体的な状況下において音声を媒体として生じるテキストを重視した。テキストは言語使用そのものであり、言語使用の所産として形に残ったものではない。B.マリノフスキー (Malinowski 1923) はトロブリアンド諸島での実地調査において発話を理解するには周囲の状況を見る必要があると指摘したが、それを受けてファースは「状況のコンテキスト」を背景や舞台装置ではなく、分析的な範疇の束であると考えた。すなわち、参与者、参与者の言語・非言語行動、言語使用と関係する物や出来事、そして言語行動の効果を構成要素とし、のちにハリデーが活動領域、対人的役割関係、伝達様式として再体系化するレジスター理論への道をひらいた。こうして、ハリデーは 1970 年代の SF 理論構築において、意味を次のような性格のものとした (Halliday 1978: 114-5) :

A sociological semantics implies not so much a general description of the semantic system of language but rather a set of context-specific semantic descriptions, each one characterizing the meaning potential that is typically associated with a given situation type. In other words, a semantic description is the description of a register. [...] A semantics of this kind forms the interface between the social system and the linguistic system; its elements realize social meanings and are realized in linguistic forms.

ハリデーが提唱したシステミック機能言語学 (Systemic Functional Linguistics, SFL) は、機能主義言語学の中でもその包括性において卓越した存在である。還元主義とは対極をなす立場から、ハリデーは機能主義の潮流の中で理論の垣根を越えた対話を通じてシステミック理論を発展させてきた。上述の記号体系モデルを念頭に、言語形式に表されうる体系としての「ポテンシャル」と、意味を具体的に表しうる構造としての「インスタンス」は、ソシュールの一般言語学を理論的に精緻化することに尽力した L.イエームスレウの業績によるところが大きい。さらに意味のポテンシャルが系列的な (paradigmatic) 関係によって支えられることもイエームスレウから多大な影響を受けている。系列的な関係をなす項 (つまり素性) の基本的な性質は、イーミック (emic) な単位を形成する概念とされるが、その背景には K.パイクが phonetic と phonemic の区別を人間の行動全般の分析に応用するために etic と emic という名称で一般化したことがある。さらに、SFL には複合的機能の原理、すなわち語の線状的な配列によって生じるテキストには複数の機能が一度に作用するように編み込まれているとする概念がある。これは言語における意味のありようが状況のコンテキスト、統語構造、語彙、音韻および音声へと拡散して見てとれることから、ファースがプリズムに喩えたことに由来すると言われるが、ハリデーが考える複合的機能とは、多層的に組織化される領域をつらぬく複数の機能のことである。この点において、C.フィルモアの格文法、J.オースティンの言語行為理論、そしてプラーク学派において展開したテーマ・レーマ構造は、いずれも語彙文法の重要な側面に光をあてている。これらは「どれかが」ではなく「どれもが」意味の仕方にかかわる編成領域 (ハリデーの「メタ機能」) をなしうるものとして統合できなければならない。ただし、SFL の包括性とはこうした対話を通じて各方面の成果を取り込み、全体としてつじつまが合うようにただ貼り合わせることを言うのではな

い。例えば、SFLにおいて、過程構成（Transitivity）は節を作用域とする過程とそれに参与する要素との役割関係を扱うシステムであるし、叙法（Mood）は発話の力もさることながら相手との交換機能に主眼が置かれ、節における主題（Theme）の提示機能と情報の新旧（Newness）はそれぞれ別の領域に分けて扱われる。

1980年代以降、こうした対話を通じて SFL を発展させる取り組みは、語彙文法もまた意味活動の資源と見なし、その語彙・構造の体系を意味レベルまで押し上げることであった（Halliday 1994: xix）。これにより、状況のコンテキストと言語をつらぬくメタ機能に即して、状況の活動領域は言語体系における経験的意味が、対人的役割関係は対人的意味が、伝達様式はテキスト形性的意味が、言語レベルにおける意味資源のコンポーネントとして記述されるようにモデルが変更された（Halliday & Hasan 1985/89: 24-28）。

2. 機能言語学の科学的探究

21世紀を迎えた SFLは何をもって科学たりうるか。この点に関し、ハリデーは次のように述べて SFL の展望を示している（Halliday 2008: 17）。科学理論は意味活動の体系に支えられており、意味資源を活用することにおいてのみ仮定に基づく議論が行われる。科学において扱われる概念は物質世界に存在するものではないが、それらを説明するだけの力をもつ。言語もまた同様である。言語は物質的な存在ではなく、「意味することのできている」。では、言語の意味資源がもつ力とは何か。それを発揮できる枠組みを提供することが科学たる言語学の目的であるとするなら、そういう言語学とは、意味資源を人間と人間を取り巻く自然・社会環境との相互作用を通じて現実作用する、すなわち「世界をつくる」能力そのものの在り方を示すことである。ハリデーは“*applied linguistics*”という概念を用いてこれからの SFL のあり方を示している。ハリデーの造語である“*applied*”の日本語訳をめぐってはまだ検討されるべき点があるが、ここでは上述の趣意を踏まえて「実能」としておきたい。

人間が言語を通じて人間から見た世界を構築し、それを現実のものとして社会を形成してきたように、そうした実能性を再現するだけの言語モデルを構築することは、SFL がまさにその展開をもって言語の実能性を実証する方法となりうるだろう。このところ脚光を浴びる生成 AI が数理モデルにもとづくプログラムであることは周知のとおりであるが、これは意味を創出し理解するようにはできていない。人間の知能とは本質的に異なる原理でデザインされていながら、人間の知能のようにふるまうことのできる人工的なプログラムが生成 AI である。それに対し、人間の知能と同じ原理で意味を創出し理解するモデルを人工的な装置に実装するという試みは、実能言語学としての SFL が将来的に切り拓くことのできる領域と言えるかもしれない。

SFL の理論・生成モデルはいくつかの研究プロジェクトによって早くから構想され、1980年代にはコンピュータ上で文を生成する大規模なプログラムが構築された。例えばフォーセットが主導する COMMUNAL プロジェクトもそのひとつである（Fawcett 2017）。このプロジェクトでコンピュータに実装される文法—英国カーディフを研究拠点とすることから「カーディフ・グラマー」と呼ばれる—は、意味の体系網から統語・音韻に具現しうる具現規則が細部まで明確化され、その実能性が科学的に検証できるようモデル化されている。しかし、カーディフ・グラマーが英語分析の記述にもとづいて構築されていることは注意すべきである。言語一般の科学理論に向けた研究では、英語とは異なる尺度で見べき文脈の中で、その言語および言語使用のありようもまた実相に即して記述できなければならない、それを「実能的に」検証することも不可欠である。その試みのひとつとして、筆者は COMMUNAL の日本語版を目指しているところであるが、その成果報告は別の機会に譲ることとしたい。

参考文献

- Butt, D. 2019. 'Firth and the origins of Systemic Functional Linguistics: Process, pragma and polysystem', in G. Thompson, W.L. Bowcher, L. Fontaine and D. Schöenthal (eds.). *The Cambridge Handbook of Systemic Functional Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fawcett, R.P. 2017. 'From meaning to form in the Cardiff model of language and its use', in T. Bartlett and G. O'Grady (eds.). *The Routledge Handbook of Systemic Functional Linguistics*. London: Routledge.
- Halliday, M.A.K. 1978. *Language as Social Semiotic: The Social Interpretation of Language and Meaning*. London: Arnold.
- Halliday, M.A.K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar, 2nd Edition*. London: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. 2008. 'Opening address: Working with meaning: Towards an applied linguistics', in J.J. Webster (ed.). *Meaning in Context: Implementing Intelligent Applications of Language Studies*. London: Continuum.
- Halliday, M.A.K. and Hasan, R. 1985/89. *Language, Context, and Text: Aspects of Language in a Social-Semiotic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Malinowski, B. 1923. 'The problem of meaning in primitive languages', Supplement 1 in C.K. Ogden and I.A. Richards (eds.). *The Meaning of Meaning: A Study of the Influence of Language upon Thought and of the Science of Symbolism*. London: Kegan Paul.